株式会社小川工務店

社員にも途上国を経験してほしい――佐世保の工務店の挑戦

長崎県・佐世保市に、アフリカで見た景色が家づくりの原点だという工務店がある。「大自然に逆らわず、常に寄り添い助けあいながら暮らすゾウの親子のように、愛があふれる家をつくりたい――」。株式会社小川工務店の代表取締役で、青年海外協力隊員としてケニアで活動した経験を持つ小川（おがわ）寛（ひろし）さんが、理想とする家づくりについてそう話してくれた。

小川さんは、建築士として東京の設計事務所で経験を積んだ後、実家の工務店に戻ったが、「アフリカの貧しい人たちのために働く」という夢が諦められず、協力隊に応募した。

1985年、建築という職種で東アフリカ・ケニアのエルドレット市役所に赴任した。首都のナイロビから北西に340キロ。人口10万人（当時）の町で、小学校や診療所、スタジアム、幼稚園などの設計管理を担当した。また、日本映画の上映会を行ったり、日本語教室を開催したりと、日本文化紹介にも努めた。

建物の設計をするなかで、ケニアと日本の違いに気づかずミスをしたこともあった。南向きの校舎を建てたあとで、赤道直下のケニアでは1年の半分は北から陽がさすことを知ったり。園児が安全に遊べるようにと配慮して、園庭を建物で囲むように設計した幼稚園の建設現場に行ったら、予定地の周囲がはるかかなたまで広がっていて、わざわざ子どもたちを囲う必要がないことがわかったり。ケニアの常識は日本の常識とはまったく違っていたのだ。

考え方も、現地の人たちと働くうちに変わってきた。赴任前は「ケニアの人たちが車に乗り、家電を持って、生活を豊かにすることに貢献したい」と考えていたが、実際のケニア人は物がなくても幸せに暮らしている。物の豊かさが心の豊かさに比例しないと気づいた。ケニア人の仕事のペースにイライラした時期もあったが、それも「時間の流れ方が違う」と意識を変えた。

「JICAボランティアに行ってきた人はみんな言うけれど、ケニアの人たちに教えたことよりも教えられたことの方が大きいですね。家族の絆、時間の流れ方……。お金や物だけが豊かさではないと気づきました。また、みんなそれぞれ、持っている『も

株式会社小川工務店
代表取締役
青年海外協力隊経験者（ケニア・建築・S60年度派遣）
小川 寛さん

1956年、長崎県出身。1978年に大学を卒業後、東京の設計事務所に勤務。その後、株式会社小川工務店に勤務し、1985年に青年海外協力隊員としてケニアに派遣される（現職参加）。1989年に帰国し、復職。1995年より現職。